

令和3年度 第1回千歳市公立大学法人評価委員会 議事要旨

1 日時 令和3年7月20日（火） 13時から16時45分まで

2 場所 千歳市役所庁議室（WEB会議）

3 出席者

【委員】 委員長 佐伯 浩
委員 小川 恭孝
委員 福村 景範
委員 森木 博之
委員 千葉 崇晶

【公立大学法人公立千歳科学技術大学】

宮永理事長 井手副理事長 表事務局長 林事務局長次長
米澤事務局次長 大西課長 庄司係長

【千歳市】

企画部 品田部長 小尾次長
公立大学政策課 佐藤課長 前田係長
産業振興部科学技術振興課 石村課長

4 傍聴者 1名

5 会議次第

- ・開会
- ・議題
 - （1）公立大学法人公立千歳科学技術大学 令和2年度業務実績報告について
 - （2）今後のスケジュールについて
 - （3）その他
- ・閉会

6 会議の概要

(1) 結果概要

議題（1）公立大学法人公立千歳科学技術大学 令和2年度業務実績報告について

公立大学法人公立千歳科学技術大学（以下「法人」という。）から、令和2年度の業務実績報告書が評価委員会に提出された。評価委員会において、科技大の令和2年度における中期計画の実施状況について、調査、分析を行い、評価するために、ヒアリングの後審議を行った。

審議の結果、法人の自己評価はおおむね妥当であると判断した。

評価書については、資料2「公立大学法人公立千歳科学技術大学 令和2年度 業務実績

評価書（作成例）」をベースとし、本日出された意見を踏まえ作成することとした。

議題（２）今後のスケジュールについて

事務局が今後の評価スケジュールを説明、質疑応答はなく了承された。

議題（３）その他

なし。

(2) 議事概要

議題（１）公立大学法人公立千歳科学技術大学 令和２年度業務実績報告について

法人による説明を受けたのち、ヒアリングを行った。質疑応答及び審議内容は次のとおり。

※ 以下の法人との質疑応答に出てくる資料のページ番号は、「資料１ 公立大学法人公立千歳科学技術大学令和２年度業務実績報告書」のページ番号である。

※ 法人補足説明 は、法人から会議終了後送付された補足説明である。

■全体評価・項目評価

【委員A】後ほど詳細な説明があるかと思うが、６ページの「大項目別評価状況」上から３つ目「国際交流に関する目標を達成するための措置」だけ、Aがない。何故ここだけAがないのか、何かうまく進まなかった部分があるのか、何か課題があったのか、その辺りを後で説明いただければありがたい。評価の項目が６件と少ないので、Aが出にくい状況にあるのか、何かあったのか、あとで教えていただきたい。

【委員B】特に私立大学などでは、留学生が突然いなくなるというようなことが起こっているようだが、科技大についてはどうなっているのか。

【法人】留学生に関しては、本学は学部については在籍していない。大学院に２名在籍しているが、大学に来なくなるという状況はない。本学は留学生が少ない。今後注力したい。

【委員A】今年はコロナの関係で教育関係が大きく状況が変わったのではないかと考えている。対面授業がなくなった、WEBでの授業が多かったなど、学生にとってみると、非常に物足りない一年だったのではないかと考えている。そういうことを考えた時に、このコロナ禍の中で、学生の教育のレベルアップをどう図ったのか、図り切れない課題が何かあったのか、その辺のところも教えていただいて、従来の教育体系と違う教育のやり方になるので、来年度以降どうしたらいいのか、そこを含めて後ほど説明いただきたい。

【法人補足説明】

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、令和２年度は、本学行動指針に従い学生生活を送ることとなった。やむを得ず大学内立ち入り禁止等の措置を行ったところであるが、こうした中でも対面授業により近い方法で授業ができるよう工夫するとともに、必要な経費を支出するなどしたところである。大学が一丸となってコロナ禍に対応し、特に、授業は教室での対面授業とビデオ会議システムのZoomを利用した授業のほか、リアルタイムZoom授業、

映像コンテンツを事前に用意し自由に受講できる授業(オンデマンド授業)などのほか、実験・実習科目についても極力、対面で実施するなどして対応した。こうしたノウハウは、令和3年度の活動にも生かされているものと考えている。

項目別実績

■教育研究等の質の向上に関する目標を達成するための措置

【委員C】コロナの制約がある中で、限られたリソースで目標達成の活動をされているなどというのは見えますが、昨年も申し上げたが、全般的にBが多いと感じる。「順調に」と「おおむね」というのがあり、数値がはっきりしているものは、その指標の度合いで、定量的に言えるが、皆さん、目標からそれぞれの担当者にブレイクダウンするときに、SやAを目指してやっていると思うので、結果としてのBだと思っている。逆に定性の方で、「順調」や「特筆すべき」になるにはどうしたらいいのかなと、もっとAが増えているのではないかなと思った。例えば、番号13などは、コロナ禍で授業がなかなか上手くいかない中で、相当工夫して、ITを駆使した色々な形態を試されていて、学生さんはかわいそうだが、これ自体がすごく大変な体験になっていて、ある意味これからのアフターコロナに対しても、学生さんにとっても新たな経験だったと思う。もし満足度とか理解度とかが上がっているとしたら、もっと評価されるべきところではないかと思ったのだが、いま申し上げたように、定性的なものについての、「おおむね」と「順調」というところのさじ加減が分らなかったのを教えていただきたい。どのように採点されているのか。

【法人】数値化されたものについては、それと同等のものについてはB、超えているものについてはAということで、その基準で評価している。中期計画の指標についてはコロナを考えずに作っているので、コロナ対策を試行錯誤しながらやっている。どの辺がBかというのは非常に難しいところがあるため、基本的には実績において、目標を達成、若しくは若干超えたものはB評価ということにしている。

【委員A】今の質問に少し関係するが、コロナで大分授業等々で工夫をして、学生さんに満足してもらったところがあると思うので、その辺のことをもう少し強調した方が良いのではないかな。あえて言うならば、非常に頑張って取り組んでおり、Aになるところがある、というところがあれば、強調していただきたい。大学としては、どう考えてもやっぱりBである、という判断なのかな。いや一生懸命工夫しましたと、図書館も色々工夫して、拡大を図ったということがあろうが、何かそういうところがあれば、PRして欲しいと思うが、如何でしょうか。

【法人】コロナがなければ、通常どおり行える年度計画となっている。コロナの影響を受けたにも関わらず、その目標を達成するというところで事業を行っており、年度計画については、Bと評価したものは、それをクリアしたという判断でBとした。この状況下でA評価というのは判断が難しい。

【委員A】 コロナ対策を色々やったが、本音としてAは付け難いということか。

【法人】 Aとしたい気持ちはあるが、ちょっと難しい。

【委員D】 コロナの状況でオンラインの授業が多いと思うが、オンラインが可能になるためには学生がパソコンを持っていないといけない。経済的な理由等でパソコンを持っていない学生等もいるかと思うが、その辺についてのケアというのはどのようにされたのか。

【法人】 本学の学生はほとんどパソコンを持っていると思うが、携帯については、ほぼ100%の学生が持っているので、携帯で授業が見れる状況にした。また、通信環境があまり良くない、という学生については、本学から、パソコンやWi-Fiシステムを貸与している。また、現在はハイフレックス、オンラインと対面、両方で授業をやっているので、通信環境が悪い学生に関しては、大学に来て、授業を受けてくださいということをやっている。

【委員D】 ハイフレックスというのは、大学に出てきて、図書館とか、パソコンのある部屋でオンラインで授業を受ける、そういう理解でよろしいか。

【法人】 ハイフレックスは、自宅でパソコンでオンラインで授業を受けるというものと、大学で対面で授業を行うというものを、同時にやっている。

【法人補足説明】

ハイフレックスとは、オンラインと教室での対面授業を同時に行う方法であり、教員は教室で授業を行っている。学生は、自宅はもちろんフリーでパソコンが使えるラーニングルームや図書館2階のAVシステム等を利用し授業を受けるケースもある。

■地域社会等との連携・協力に関する目標を達成するための措置

【委員C】 全般としてこちらの章については、昨年度も期限を決めて一気にやっつけようというのもあったと思うので、多分コロナの第2波、第3波の辺りを縫うように、すごく工夫して行ったのかなと思って見ていた。例えば44番を中心に伺おうかと思うのだが、民間から相談があったとき、私も経験があるが、なかなかマッチするのは難しく、かみ合うまでには時間がかかるところはあるのではないかと考えている。これは最終的には、ノウハウの提供を行う、学校からベンチャーを興す、というくらいのことである。その上で、地域社会の課題解決みたいなものが出てくる。課題を教えてほしいのだが、地域の課題はこういうことで、学校でやっていることではなかなかこういう所が届いていないと。相談を受けるにしても、専門家がアドバイスするという所まではいくが、そこから先は向こうのニーズと合わない、ということもあるのではないかと思うのだが、今後これを高度に進めていくために、まだこういうところにリソースが足りないとか、ニーズを捉えきれていない、というような課題があったら教えていただきたい。

【法人】 本学にはコーディネーターがおり、その方が市内の企業等から相談を受けているが、仰るとおり、本学の専門分野外の、全く本学では対応できない相談が大体1割ほどあり、それに関しては本学では対応できないということをお話ししている。それ以外については、地域連携

センターで該当する先生方に振り、相談に対して、何らかの回答をしているという状況である。課題としては、コロナの影響で、コーディネーターの活動もかなり抑えられているので、その辺が活発になれば、さらにまた、相談があると思う。本学の教員自体も採用して体制を整えていることから、更に相談に対応できるものが増えていくのではないかと考えている。

【委員C】相談された内容については、相談者は一応満足されていると、ということですね。分かりました。

【法人補足説明】

地域連携センターに技術コーディネーターを配置しており、市内の企業等から相談を受けている。その中で本学の専門分野外の相談も1割程度あり、対応できないものについてはやむを得ずお断りしている。相談内容に応じて、地域連携センターから該当する本学教員に対応を依頼し、極力、何らかの回答をするように心がけている。

解決できない地域課題については、その相談内容に対応できる機関を紹介するなどの情報提供も行っているが、今後は本学と共同研究等で関わりのある高等教育機関や研究機関等と連携し、課題を共有し、解決する方策を検討する。

令和2年度の課題としては、新型コロナウイルス感染症の影響に伴い、活動が十分に行き届かなかった点である。活動が活発になれば、相談件数も増加し、また、教員も増員する計画であることから様々な課題に対応できるように体制整備していきたい。

【委員E】32 ページ目、番号 17 番、コンテンツ改修件数の実績が目標 1,500 件に対して 8,146 件となっており、理由として、ソフトウェアのサポートが期限切れになってしまったことによる改修ということで、大幅に増加していますと。ですが、中期計画の指標として「eラーニングシステムのリクエストに基づくコンテンツ改修件数を年 1,500 件以上とする」となっており、ソフトウェアのサポートが切れたことによる改修がこの中期計画の趣旨に合っているのかどうかというのが分からないのだが、どのように整理すれば良いか、教えていただきたい。

【法人】リクエストに基づく改修も、この中には入っている。その大きな理由は、ソフトウェアのサポートが切れたため、コンテンツの改修を行ったということであり、両方を含めた回数ということで理解していただきたい。

【委員E】両方含まれているという回答だが、1,500 件を超えたということではよろしいでしょうか。

【法人】超えている。

【委員E】具体的に何件か教えていただけますか。

【法人】昨年度と同様くらいかと思えます。

【事務局】確認した数字を後ほどでも教えていただきたい。

※確認後の法人回答：32 ページ指標⑰のコンテンツ改修については、リクエストに基づくコンテンツ改修が 1,631 件であった。

■国際交流に関する目標を達成するための措置

【委員A】37ページの56番「学内特別研究費に振り替えて、外部研究費獲得に向けての予備研究費とし」ということだが、金額はいくらか。何百万なのか、何千万なのか、何億なのか分からないが、ここに振り替えた金額はいくら位か。

【法人】予算的には1千万円。実際には1千万弱位です。

【委員A】1千万円を振り替えたということ。予備研究費として。

【法人】枠内で特別研究費ということで6名の教員に交付したということです。

【委員A】1千万円を？合計で？

【法人】はい。

【法人補足説明】

振り替えた額は学内特別研究費としての予算は1,000万円である。全てを振り替えたものでない。

振替額のうち850万円は研究費、50万円が研修費、100万円が国際学会参加助成費である。

国際学会参加費の100万円は、外部研究費獲得に向けての予備研究費に振替額としたものである。予算額1,000万円に対して872万円を執行した。

【委員A】冒頭にも申し上げたが、なかなかAが取れないという所は、どういう所なのか。やはり高い目標に向かって、Aをとっていくことが大事なのではないか、と思うのだが。Aを取れなかったのはどういう所なのか。

【法人】国際交流に関して、本学はそれほど活発に国際交流を行って来ていなかった。大学間協定もそうですし、留学生の受け入れなどもそれほど盛んではなかったもので、これから、国際交流に力を入れていくということで、こういった中期計画等々を立てているところなので、なかなかA評価というのは、今の段階では難しいと考えている。

【委員A】千歳は国際都市の一つですので、そのメリットを生かして、我々市民としても、科技大がより国際的な大学になることを期待している。是非項目をもっとプラスアルファで挙げてもらい、Aを目指して、名だたる国際大学になってもらいたい、という希望である。よろしくをお願いします。

【法人】学長の宮永先生は海外大学との交流経験も豊富な先生であり、学長を中心に進めていきたいと考えている。

【委員長】今の質問について私も感じるのですが、いろいろな大学と国際協力をしながら研究教育を進めていくというのは非常に良いことだが、千歳の公立大学のひとつの特徴が、近くに国際空港、大きな空港を抱えていることからすると、韓国の大学とも協定を結ばれているようだが、例えばアジアのハブ空港の一つである仁川空港、あそこにも大学があるが、空港が非常に大きくなってから、大学が著しく成長している。韓国有数の大学に今なりつつある。空港がらみの連携のようなものも、将来考えたらいいのではないかという気がする。

【委員C】このページを見ていると、タイ、オーストラリアというところが何回か出ている。

おそらく特定の分野や先生が、コロナですごくやりにくい中、ウェブなどを活用しながら、パーソナルな関係構築から一生懸命されたのではないかと思う。そこで、差し支えなければ、科技大の強みという所での可能性なのか、こらからもっと海外に手を繋げていけるような見通しがあるのか、答えられる範囲で教えていただきたい。

【法人】 タイのチュラロンコン大学とオーストラリアのシドニー工科大学とは古くからマルチメディアや情報通信の分野で共同研究をしている。今は、少ない教員同士の付き合いだが、国際交流協定 (MOU : Memorandum of Understanding) 締結に向けて調整している状況にある。

【委員C】 では強みを生かせる方向にあるということですか。これから下話を進めていくということ。

【法人】 今年度か来年度に、そういう方向に進めていくという予定である。

【委員E】 37 ページの項目②だが、目標値4機関に対して実績3機関で目標値を下回っているが、評価がB、年度計画どおり実施されているということになっている。これをBにした理由を教えていただきたい。

【法人】 こちらの項目について、年度計画に書いてあるとおり、海外大学との連携・協力等について調査し、今後の可能性について報告するというので、それに関しまして、現在連携している3大学に加えて、シドニー工科大学、チュラロンコン大学等々との連携を検討しており、可能性は十分あると考えている。そういうことを含めて、実績は3機関だが、可能性があるということでB評価とした。

■業務運営の改善及び効率化に関する目標を達成するための措置

【委員A】 40 ページだが、各業務の実績の中に、いつ、どこの会議で、何を行ったのかというのが書かれているとありがたい。例えば、「事務の体制の検証を行った結果」、これはいつどういう会議で行ったのか。いつどういう会議で「複数配置が必要であると判断して」、いつから配置したのか、この場合は「令和3年度より」だから、4月1日ですか。具体的な数値というか、具体的な項目が書かれていると、成程、と分かるのだが、全て、「こういうことやりました」、「もう実施しています」、ということだけが書かれている。もう少し細かな記述があると評価しやすいのだが、いかがでしょうか。

【法人】 今のは項目でいうと64番でしょうか。

【委員A】 63番も64番もそうである。64番は、「事務分掌で定められている業務内容、業務量及びその業務を遂行するための適切な人員配置がなされているかを検証し」、これはいつ検証したのか。その結果、「事務の一部見直しを行った」とあるが、どういう見直しを行って、いつから実施されたのか、ということが、全然分からない。

【法人】 今の項目に関しましては、昨年の9月か10月に事務局内で組織体制の一部見直し、情報メディア課の情報メディア係は、メディアと図書、両方が一体となった係であったが、図書館の充実を図るために、図書館にも係長を置く、係を分離する、ということを経理局内で話し、内部決裁を行い、本学の学内理事会に諮るという方法をとって、組織の一部見直しを昨年の秋に行っている。

【委員A】そういうことをしていると思うのだが、今回の資料を修正していただけるのであれば、いつ何を、という、定量的な数値が書かれていると良いかと思う。もし今回の資料が修正できないのであれば、次回から、5W1Hで、いつ何をを行ったのか、きちんと書かれていると分かりやすい、と思うので、よろしくお願ひしたい。

【法人】次回からはそのようにしたい。

■財務内容の改善に関する目標を達成するための措置

【委員C】お金の方に関しては、決算の方も見させていただいたが、非常に頑張っているし、学びが難しくなりそうな学生さんに柔軟に対応されている所など、ある意味学校のあつたかさが伝わる部分で、非常に評価できると思う。個人的には、「最小の経費で最大の効果」というのは、大学という所に生産性をゴリゴリ求めるのかというの、私も個人的には思いはあるが、大変努力されているのかなと思った。その上で、お金のところでですね、張り込みが難しくなっている項目、もうちょっと張りたいが、全体のバランスの中でなかなか行き届かないみたいな所、予算項目みたいな所があったら教えて欲しい。これからのコロナの対応みたいなところで、これからまだ足りない所、環境改善しなければいけない所などがあるのではないかと考えているのだが、ちょっと教えていただければと思います。

【法人】コロナ関係で言うと、例えば授業関係でハイフレックス、オンラインでやっているが、それに伴う装置、それで十分かというところもあろうかと思うが、一応準備したところである。学生に対しては、緊急生活支援金ということで、自宅生3万円、自宅外生5万円ということで昨年度支給しております。今年度もコロナの状況が比較的に変わっておらず、アルバイトができないなどもあり、そういった部分で、通信環境が学生にとって十分になっているかどうかというの、完全に十分とは言えない部分もあろうかと思うので、その辺の支援等に関しては、今後考えていかなければいけない部分もあるのではないかと考えている。限られた予算の中でやっており、難しいところもあるが、そちらを見据えて、今後どういった支援を行っていくかということを検討していきたいと考えている。

【委員C】一点言い忘れたが、皆さんに財務の内容を説明したという記載があり、コメントですが、こういう取組はすごく良いなと思います。予算の仕組みや上位の目標がどうなっているかということに対して、ひとこと言わせていただきました。

■自己点検、評価及び情報公開に関する目標を達成するための措置

■その他業務運営に関する重要目標を達成するための措置

【委員E】評価に関して、番号の91番、評価Aということで、ざっと見た感じ、定性的評価でAとなっているのは91番だけかと思うが、ここをA評価とした理由を教えてください。

【法人】これに関しては、新型コロナウイルス感染症検討会議を設置し、大学としての感染症拡大防止の取り組みを、かなり実施したということで、A評価とさせていただいた。

■中期目標期間において達成すべき数値的目標

- 予算（人件費を含む）、収支計算及び資金計画
- 短期借入金の限度額
- 出資等に係る不要財産の処分に関する計画
- 重要な財産を譲渡し、又は担保に供する計画
- 剰余金の使途
- 公立大学法人公立千歳科学技術大学の業務運営並びに財務及び会計に関する規則で定める事項

【委員A】 キャッシュ・フロー計算書について、44 ページ「競争的研究資金、共同研究、受託研究、奨学寄附金などの外部資金を獲得するための施策を推進する」ということで、今年度は3件受託したということだが、この辺の項目はこのキャッシュ・フロー計算書のどの部分に書かれているのか。大学の収入は、学生からの授業料、地方公共団体や国からの補助金等があるが、先生方が外部と色々研究されて、資金を集めて研究されているのではないかと思っている。この研究費が、このキャッシュ・フロー計算書の中のどの部分に表れているのか、ということを確認したい。

【法人】 外部から獲得した奨学寄附金は、「I 業務活動によるキャッシュ・フロー」の下から4行目に「寄附金収入」という欄があり、そこに含まれている。また、受託研究、共同研究については、その上に、「受託研究収入」「共同研究収入」という項目があり、こちらに含まれている。

【委員A】 受託事業等収入 1,095,784 円、これが、44 ページの 74 項目の 3 件に該当するのか。

【法人】 3 件というのは、45 ページの指標⑳のことでしょうか。指標⑳の 3 件は、キャッシュ・フローの「寄附金収入」の中に入っている。

【委員A】 10,258,000 円ですね。

【法人】 ここには民間からの寄附金も入っているので、この 10,258,000 円の中に、指標⑳の 3 件も含まれている。

【委員A】 44 ページの 74 番の費用というのはどこに入っているんですか。

【法人】 44 ページの 74 番にあります。外部研究費ですが、これはキャッシュ・フローでいくと、「受託研究収入」に入っている。

【委員A】 30,063,661 円ですね。分かりました。大学としてはこういう部分をいかに増やしていくかと。件数はさることながら、金額そのものを、これからは増やしていくということになるのでしょね。課題としては。如何でしょうか。

【法人】 それに関しては、現在も受託研究とか共同研究などは増えている。奨学寄附金に関しては少し少ないが、いずれにしても、その3つを合わせて、これからも増やすように努力していきたいと思っている。

【委員A】 そうすると今までは指標を件数としているが、ある程度金額でおいていかないと、目標としては少し心もとないかなという感じはする。これからの話ではあるが。

【法人補足説明】

※ 44 ページの項目番号 74 番記載の 3 件がキャッシュ・フロー計算書のどこに対応するのかについて

①文部科学省の「マテリアル先端リサーチインフラ」の研究費は、42,592,000 円である。令和 3 年 2 月に研究費の交付決定がなされ令和 3 年 4 月 27 日に入金になったことから、決算報告書の「受託研究等収入」及び損益計算書の「受託研究収益」に計上しているが、会計処理上、キャッシュ・フロー計算書には計上されていない。

②経済産業省の「戦略的基盤技術高度化支援事業補助金」は、補助金額 140,580 円である。この事業は、キャッシュ・フロー計算書の「補助金等収入」に計上している。

③科学技術振興機構の「研究成果最適展開支援プログラム (A-STEP)「トライアウト」」の研究費は、1,365,910 円である。事業採択が令和 3 年 3 月 31 日であったことから、外部資金の獲得として計上しているが、研究期間が令和 3 年 5 月 1 日から令和 4 年 3 月 31 日までのため、今年度のキャッシュ・フロー計算書等には計上していない。

～法人退席～

業務実績報告の説明終了後、法人は退席。その後委員会で審議を行った。

【事務局】（審議の進め方について説明後、事務局で確認した数値目標と実績報告との差異について説明）数値目標のあるものについて、目標値を自己評価に差異がないか事務局が確認したところ、12 ページの番号①の指標については、大学は A 評価としているが、中期計画に掲げた「令和 3 年度以降継続して収容定員充足率 100%を確保する」に対し、大学院の収容定員充足率が 93.3%となっている。また、30 ページの下段、番号⑩の指標について、中期計画の指標が「セミナー、展示等の開催実績を年 2 回以上とする」に対し、実績が「開催」ではなく「出展」となっている。

【委員 D】 事務局から説明のあった 12 ページの番号①、大学院の収容定員充足率が 93.9%で 100%になっていない、ということだが、やはり科技大に大事なものは、今の段階では学部学生だと思う。ということで、大学院は 100%にはなっていないが、学部は入学定員充足率、収容定員充足率が優に 100%を超えているので、総合的な判断から、A ということで良いのではないかと私は考えている。

【委員長】 先が読めない時代であるというのものもあるかもしれないが、数がすごく下回っているという訳でもなく、ほぼ 100%ということだと思うが、このまま A で良いのかどうか。委員の皆様様の判断をいただきたいところですが。

【委員 A】 足りないのは 2 名ですか？

【事務局】 3 名です。49 名総数に対し、46 名となっている。

【委員A】何故3名足りないのか。入学者数は満たしているのか。

【委員D】公立大学になって、その公立大学になってから入学した学生が大学院に進学するときというのは、100%を超すということは期待できると思う。今はまだ、私立大学時代の学生が大学院に入学していて、そういう過渡期的なことがあるので、この段階ではこういう数字が出るのかなと思う。そういうことも考えてAで良いのかなと考えている。

【委員A】そうすると充足するのは公立化して4年経ってからということになりますか。

【委員長】そういう意味ではあと数年経ったら大学院に進学してくるという時代が来るかもしれない。そういうことを考えると、Aで十分なのではないか、という判断もあるという、そういうことですね。私立大学時代の学部学生が今は大学院に来ている。もう数年たったら、公立化後の学部学生が入学して来るということを考えると、100%に近いのではないかと。

【委員D】それに加えて、参考までに、21 ページの⑦の指標がある。その業務実績の②に、大学院の進学希望調査をしたとある。対象者は学部1年生のうち「キャリア形成A2」の授業受講者266人中、アンケートに回答した176人のうち大学院に進学を希望する者は66人(37.5%)であった、とある。公立大学になって入学して来た学生というのは、かなり大学院進学ということを考えている、ということを考えると、公立大学の学生が卒業するころには、大学院進学希望者も多くなるということは十分考えられる。それを見越して、指標はAで良いのではないかと考えている。

【委員長】道内の理工系私立大学では、大学院に残ってほしいと思っている学生は残ってくれないという話を聞く。そういうことからすると、若い学部学生が、大学院を目指している、いわゆる国立大学の理工系と似たような傾向にあるんじゃないかなと思います。今回は100%には達していないが、100%になる時代がそこまで来ているのだという意味では、Aにしても良いのではないかと。

【委員A】納得しました。

【委員長】それではAということによろしいでしょうか。

【委員各位】～了承～

【委員E】46 ページ、47 ページだが、経費節減に関する目標が、数値目標除いてすべてBということになっているが、各項目をよく見てみると、経費節減がよくできている、いう記載になっており、また、資料2附属書類2かな、予算と決算の対比がされている決算書があるが、一般管理費が16,903千円減になっている。この辺の考え方はどのように整理したらいいか。私は予算よりも実績を抑えたのだから、目標を達成したという評価でもいいのかなと思うが。予算の見積もりが甘かったという見方もあるが。

【委員A】決算報告書の一般管理費16,903千円減というのが、全てこの経費削減に関する項目に当てはまるかどうかというのは、分からないのではないかと。そうすると、決算報告書で判断しましょう、ということになるのではないかと。これが予算よりマイナスであれば、Aにします。プラスであれば、Cか、Dか、ということになり、そうすると、各項目が連動しないというか、中身は連動しているのだと思うが、数字だけでは分からないところがあるので、私はやはり、細かく見るのはこういう項目があって、達成が十分出来ていない、Aになっていないと

ころはBで評価してよろしいのではないかと思います。

【委員長】実質これはコロナの影響でしょうね。やりたいこと、やろうと思っていたことがコロナでできなかった、それで支出が減ったということだと思います。

【委員A】37 ページ、国際交流に関する項目のところですが、指標番号②、目標が4機関で実績が3機関ですから、これはBというよりもCなのではないかと思うがどうでしょうか。見込があるので何となくBにしている、という話が先ほどあったが。目標をきちっと掲げている以上、やはり、達成されていない以上Cなのではないかと、私はここの部分は判断した。

それに絡んで、評価書作成例の、国際交流に関するところが、結局Aになっている。これ事務局案ですよ。

【事務局】事務局が大学の自己評価を単純に集計して作成したものです。

【委員A】これはAになるのか。全部Bですよ、これ。資料2の10 ページだが、ここの国際交流全体の項目評価がA評価ということになっているが、私は、この項目全部Bで、しかも一番下の指標②がCになるのではないかと思うので、全体評価もAではなくBになるのではないかと判断したのだが、どうですか。

【事務局】評価について簡単に説明すると、評価の基準でいくと、大学の評価が全てA又はBになっていましたので、作成例では基準どおりAとした。AとBの割合が9割以上だとB評価という基準になっている。

【委員D】資料2の1 ページの下に表がある。この表の一番左にあるS、A、B、Cが、これが評価結果のAに対応するのだが、これと小項目、指標のA、Bが違う。同じアルファベットを使っているが、指している内容が、小項目、指標のAと、項目別評価のAとは違っていると。ですから、国際交流で全部Bなのに、何故評価がAなのかということ、小項目の評価が全部Bであれば全体の評価はAになるということで、小項目のA、Bと、評価のA、Bが違っているという、紛らわしい点がある。ここの書き方は、事務局の書き方で問題はない。それを妥当とするかどうかは別だが、そういう具合に非常に紛らわしい点があるという、それを踏まえた上で、考えていきたいと思います。

【委員A】そうしますと、小項目がすべてBであれば、Aに該当しますよということですね。指標②がもしCならば、Aにならないということですね。

【委員D】そうです。

【委員A】Aは目標値を超えていることですよ。Bは同じくらい。クリアしてなければCですよ。厳しすぎますか。

【委員D】数値だけで判断するか、総合的に背景も考えて判断するかということで、大学としては、4に満たないけれどもシドニー工科大学と、チュラロンコン大学の連携ということが視野に入っているということでBを提案してきたと。それはそれで良いのかな、とも思う。私はどちらかという、Bで良いかなと思っていた。

【委員A】私は科技大に対する期待が、国際交流など、色々な面での期待が多いものですから、今の状態でAということになると、科技大は満足し過ぎてしまわないかというのがあります。もっと先を見てもらわないと困る、ということで、厳しめでこれはCにして、全体もBにした

らどうかと、私の個人的な見解ですが。

【委員長】国際交流ということで、海外の大学と提携を結んで研究を加速させるという方法は各大学でやっているが、大事なことは何のためにやるのかということである。先生方の個人的なつながりで提携を結ぶということが多いのでしょうか、では千歳という、大きな空港が近くにあるまちで、或いは苫小牧港が近くにあるまちの大学にとって、どこの大学とどこの国の大学と交流協定を結んでいくかというのが最も大事なことだという気がする。個人的な知り合いがいると非常にやり易いことはやり易いが、当然公立大学ですから、地域の発展などを考えた時には、ただそれだけで本当に交流協定を結ぶことが良いのかどうか、というのは少し考えてみる必要があるのかなと思います。

【委員E】指標①と②の用語の定義の問題だと思う。①は提携大学数、②は提携・協力先大学数で、3と4の差をつけているのかなと。

【委員A】機関と大学ですね。

【委員C】私はBで良いかなと思います。①も②も、同じ案件ですよ。今後連携が進みそうだという見込みや期待を感じましたので、妥当にBかなと。ルール決めでAになってしまうのは仕方がないと思います。その定義でそうになってしまうわけですから、評価理由のところで書き表わせれば良いのかなと。私は敢えて1個だけCにしなくても良いのではないかと思います。

【委員長】科技大を千歳市の将来の構想を示せるような形に少しずつ持っていくことも重要なのではないかという気がする。そういう意味では、今回情報系の分野の大学と連携協定を結ぼうとしているというのは、今後の千歳市の方向性にも良いのではないか。既に福島の会津大学など、情報に特化した公立大学で成功している大学がありますから。苫小牧あり、札幌ありという中で、これからの千歳をどうするかということ、冷涼な気候とか、国際空港を持っているということを見ると、何かそれらを軸にまちづくりに反映していく、そこに集まってくる学生も、将来のまちを成長させるような若者が集まってくる、そういうことを考えながら大学づくりを進めていくのが、公立大学としては良いのではないかと思う。

最初は光科学というところで始まった大学だと思うが、今は少しずつ形を変えていっている、それが一つの千歳の将来を見通した結果かな、という風に私は見ていた。国際交流をどういう風にやっていくかということ、そういう戦略を先行した大学もありますし、そういうところも参考にしながら大学の将来を考えていくというものもあるかなと思う。

私は評価のA、B、Cはあまり気にせず、大学としてそれを将来どう持っていくのか、という考えがきちんと反映されるようなことをやっていく、ということが非常に重要だと感じている。千歳市がこう考えている、というのがきちんと出てくるのが良い。大学の評価結果はどこも似ていて、何故こっちがAでこっちがBなのか、と思うものもある。第三者が見た時に感じるのは、大学は将来こういうことを目指しているのだな、というのが評価の付け方で明確に出ている大学もあれば、何となく付けたな、という大学もある。

ですから私はA、B、Cのどれか、というよりも、将来の市の方針が、結果としてその中に出てきていると、千歳ってこういうことを目指してやっていこうとしているのだな、というのが分かる位の方が良い、という気がしている。

【委員A】 それでは先生からいただいたコメントを、この評価項目に書いていただいて、指標②はB、国際交流の評価はA、それで納得するようにいたします。

【委員長】 空港の近くにある大学である、というのは特異なことである。国土計画に関わった方が、北海道に来られたときに、飛行機の時代はずっと続くが、10時間も飛行機に乗るような旅は人間の体力の限界だと。飛行機に乗るのはせいぜい5時間から6時間位だろう、将来ヨーロッパに直行便で行くことはなくなるだろうと。将来の流れは予測できないが、公立大学の特徴が、空港の近くにあるということで、しかも苫小牧港もあって海もあると。そういう交通の要衝にあるというのは特異である。例えばこの点に、重点を置いているんだな、というのがあると大学にとって非常にいいのかなと。それも公立大学の一つの特徴かなという気はします。

日本からヨーロッパに行くのに一番近い空港はフィンランドかノルウェーなんですね。フィンランドまで行って、そこからヨーロッパの国に行くのが最短のルートだが、今はロンドンに行って、そこから逆戻りしてほかの国に行っている。そういう意味では、千歳はその中のルートの一つになり得る。本当は日本から出るのに、成田ではなく、千歳に来て行った方がヨーロッパに行くのには良い。フィンランドのヘルシンキ空港を経由してヨーロッパの各都市に行くようになったので、ヘルシンキ空港が一気に大きくなったということがあるので、千歳も可能性はある。そういうことも意識して、大学の先生方も勉強していただければなと思います。そういう意識をもって研究にあたっていただければ良いのかなと思います。

【委員A】 科技大も国際化したいという気持ちはあるのでしょうか。

【委員D】 何かの点数はつけないといけませんので、いろいろご意見はありましたが、ここは大学の申告のとおり、Bのままにさせていただくということでよろしいのではないのでしょうか。

【委員A】 よろしいですよ。納得しました。

【委員D】 事務局から指摘のあった30ページの番号⑩、「出展」なのか「開催」なのかというところですが、ここについての議論が必要です。中期計画は「開催」になっているけども、年度計画はセミナー・展示会への出展、となっている、ここはこのままでいいのかなと思いますが、いかがでしょうか。自分が主体となって開催するというのが理想ですが、今の段階では、どこかが開催しているところに出展してアピールするというので、それが達成されたと、それでA評価であるという、それを認めるということで良いのかなと思います。

【委員C】 私も同じ意見です。

【委員長】 ほかにご意見ございますか

【委員A】 私もよろしいですよ。このままで。

【委員C】 6番の財務内容のところでもよろしいでしょうか。去年も言いましたが、指標が4件なので、1件失うと25%になってしまい、定義によるとCになる。これはほぼコロナが原因で、自分たちでコントロールできないところでCが付いてしまったみたいなので、全体を見ると、さっきもありましたが、むしろ事務方でゴリゴリお金減らして、できる所は詰めに詰めてやっているのに、全体評価として「やや遅れている」、という表現になるのが、実態とは合わない。

むしろ詰めるところはお金としてはちゃんと詰めて、課題はあるけれども、健全にやっている、というのがどちらかという実態なのではないかと思う。指標が少なすぎるのかもしれないが、ちょっと実態と違うな、と思いました。

【委員長】ほかの委員の方、ただ今のご意見に何かありますか。

【委員A】事務局にお聞きしたいが、指標⑳、これがCになっているが、その1項目で全体がCになるのか。

【事務局】先ほどの目安の区分で、A又はBの割合が9割未満になると、C評価になる。

【委員A】私もCは厳しいかなという印象があります。印象で話してはいけないかもしれませんが、そういう感じはします。こだわって申し訳ないが、国際交流はBかなという気がしましたが、ここはCは厳しいと思います。

【事務局】去年評価いただいた時も、単純にカウントすると9割未満なのでC、という項目がありました。しかし、コロナの影響によるものなので、1項目がA又はBでないことをもって全体をCとするのは如何なものか、ということで、カウントとしてはCだが、全体の評価としてはBとしましょう、という判断したものがあつた。

今回も、事務局の例としては、単純に9割を超えるか超えないかで作成しているが、最終的にどの評価にするかというのは、同じように、内容的にBが適切なのではないか、いやいやCのままではないか、ということをご判断いただければと思います。

【委員C】次回の中期計画の時は指標を見直したほうがいいのかと思います。Bくらいが良いのではないかという気がします。項目によってはAくらいお金を集めているのもあるので、Bくらいが、実態に沿うような評価が適切かなと思います。

【委員長】B評価ということでよろしいですか。

【委員各位】～了承～

【委員D】35 ページを見ていただきたいのですが、これも先ほどからのコロナに関係するところですが、理工工房学生の市内活動実績、これ評価Cになっています。目標が50回なのに実績が14回だと。これも結局新型コロナウイルスの影響で、こういうイベントができなかった、これは科技大の責任ではないと考えると。そうすると、やはり数値はクリアできていないので、それを考えるとCですが、背景を考えるとBでも良いのかなと思いました。CをBに変えるということを提案させていただきたいと思います。

【委員A】ここをBに変えても総合評価は変わらないのでしょうか。

【委員D】変わると思います。Aに上がると思います。Cが入ってくるとBだが、全部がA又はBだと、Aに上がります。そこも踏まえてご議論いただければと思います。

【委員A】私は50が14ですので、コロナということはあるのですが、数字上はやはりCはCかなという気がします。コロナの事情は確かにありますが。

【委員長】いかがでしょうか。科技大としては努力したけれども、これ以上努力しようがなかったと、無理だったと。ここをBにすると、全体がBからAに変わると。

【委員E】私も、もっと科技大には地域貢献を頑張っていたいただきたいと思っているので、Bでい

いと思います。

【委員長】評価がBかCかというのはあまり関係なくて、関係ないというのは言い過ぎかもしれませんが、これはコロナのせいだな、というのは、誰でも気づくことではありますよね。でもまた、あまり良い評価を与え過ぎると、来年度以降これ以上、上がらない、というのも気の毒な感じがします。

【委員D】了解しました。次年度以降の励みにしていただきたいということで、Cのままにするということで了解いたしました。

【委員C】評価表作成例の全体の記述に関しては、大体全体感含めて問題ないかなと、素直に書かれているかなと思いました。別の資料、参考資料4ですが、令和元年度の我々の意見等で、ある種注力というか、実効度を高めるために、メリハリをつけてマネジメントしてください、というのに対して、大学側は、中期計画でブレイクしたものを一個一個達成していきます、っという回答である。こういうところがかみ合っていないというか、全体の空気として分かったら教えてほしいのだが、マネジメントプログラムの、これを実施すれば、上位の目標が本当に達成できる、ということが各人に落とし込まれているのか、ということに危惧している。皆、何十もある評価項目に同じエネルギーを注力している訳ではないと思うのだが、10行くらい書いてあるものあれば、1行ぐらいしか書いてないものもある訳だから、その辺のこちらの意図が伝わっていないのではないか、職員にこういうものを共有するのが難しいと思っているのか、という所を教えてください。

【事務局】この資料を作成するにあたって担当とやり取りをしているが、本当に職員一人ひとりに意識がいつているか、ということについては、もう少しレベルアップ出来る余地があるかな、という印象を持っている。

【委員長】私も以前大学にいて、評価の関係もやっていたが、実際に大学の先生全員が集まってどうするかというのを議論するということはありません。結局、熱心な先生、あの先生ならやってくれるだろう、という先生が中心になる。やらされている、という言い方はどうかと思うが、当たった先生は、若干やらされ感というか、本音としては、自分はこういうことをやりたいのだが、というのがありながら、まとめなければならないという。また先生方も議論を始めたらなかなか結論が出ない議論になってしまうので、学長は学長で、お前に任せろぞという形で、まず一回まとめてくれと、そしてその後それを基に議論すると。議論するとなると議論する人にも責任がかかるので、なかなか言いにくい。結局評価する主体になる人たちが、ものすごく苦勞する割にもものすごく報われない。議論が場合によって大反発を食うこともあるので、出来るだけ学内的に波風立たないような、対外的にはどう言われても良いが、学内的にはメリハリのない決断を出さざるを得ない。そういうところに大学の組織としての欠点があって、評価をやること自体が自分たちの仕事と思っていない人たちがいる訳ですから、なかなかそのあたりが、学長としてもやりにくいところではないかなと思う。一番難しいのはやはりそこで、組織的に一丸となってやるぞ、という力が大学ではなかなか出しにくい。では評価をしたら見返りがあるかという、これもなかなかない。公立大学の場合は、すごくいい結果を出した結果、何か予算が付く、とかあれば良いんですが。国立大学の場合は全くない訳ではな

い。大学から集めたお金の一部を、良い評価を出した大学に配りなおす、ということを実際やっている。額としては非常に小さいので、それを一生懸命取りに行く、というよりは、できるだけ少ない労力で、外から見ても、まあこの程度であれば良いだろう、という評価を出さざるを得ない。そういう意味では、学長自ら「俺が評価委員になってやる」くらいのつもりの方が出ると変わるかもしれませんが、だれか先生に任せてやっているうちは。大学の先生は、教育と研究と社会貢献という評価項目がありますが、大学評価のために必死に頑張った、というのは評価されない、というのが現状なので、結論がぼんやりしたものに成りかねない。評価が還元されるということがあると、変わるかと思うが。ですから、当たった先生が非常に気の毒な思いをしながらやっている状態ではないかと思います。憶測ですが。

【委員C】今のお話で、現状というか、良く分かりました。社会貢献と地域貢献、すごくいいことだと思いますが、そういう意味ではちょっと背負い過ぎというか、もっと技術系の人には、自由に、ぼーっとした時間を与えるようにした方が将来的にはいいのではないかと思います。少しブレークが細かくなりすぎて、やること自体が目的、という人が増えてると、本来の理科系大学の役割を果たせないのではないかと少し感じました。

【委員長】評価のリーダーの方は自分の時間を犠牲にしてやっていると思います。本当は評価するプロを育てるべきですが、そういう人材はなかなか養成しにくい。結局何でもやってくれる先生に負担がいつてしまう、というのが大学の問題なのですが。本当は評価というのは大切ですから、専門の人を育てることが大事だという気がしますが。ですから市の人たちもやりにくいのではないかと思います。大学の全教職員が組織的にそれをやっていく、という形はなかなか見えてこないのではないかと思います。

【委員E】いろいろ事情はあると思いますが、もう少しメリハリをつけて、定性的な差異はやっていただけると良いのではないかと思います。

【委員A】事務局が書かれた、最後大学が知の拠点として、というのは、地域貢献というがあるので書いているのだと思いますが、もう一つ人材育成ということも、終わりの方に触れておいた方が良いのではないのでしょうか。千歳科技大だから、ということで、そこに縛りすぎているコメントになっているのが気になる。やはりグローバルな人材、研究に特化したような、グローバルな人材を育成しながら、なおかつ千歳に貢献できるような、二刀流で攻めていく。これだと、千歳オンリーのような書きぶりなのが気になりました。ちょっと考えていただければと思います。

【委員長】公立大学ですから、地元にとっても、市がメリットを受けるような研究が出てきて、市の発展につながる、ということになると良いですね。これだけ入学が難しくなってくると、千歳以外からも学生さんが集まってくるという状況にますますなってくるでしょうから、そういう意味では、千歳に若い良い人材が集まってくる、という意味でも良いと思います。我々も自分の研究は一生懸命やりますが、大学のためにと言われるとなかなか重たくなってくる場所がある。科技大の先生方も、一部の先生に負担がかからないようなことを、千歳市としてもできるだけ大学のことを公正に見ていただけたらと思います。学長はどうしても動かしやすい人にどんどん頼むというところがあり、その人にばかり荷重がかかるということ

にならないように、していただければと思いますが。評価することは非常に大事ですし、それによって大学も進化すると思いますが、見てくれる第三者の人が必要ですね。各大学の評価が出て公表されていますが、第三者から見て、だから何なのかな、というところはありますよね。それよりは特徴を書いてもらいたいと思います。それだけ見て大学が分かるとか、それを見て受験生が集まってくる、ということはありませんよね。

【事務局】確認ですが、評価書の「6 財務内容の改善」について、ここはCではなくてBとする、ということで良いでしょうか。

【委員A】私はそのつもりでした。

【委員E】私もそれでいいと思います。結果当期純利益が1億を超えたという結果を出しているのので、その結果を踏まえるとCというのは実態とそぐわないというのはそのとおりだと思います。

【事務局】わかりました。それではBということで評価書案を作らせていただきます。

【事務局】資料2の作成例の全体評価について確認をお願いします。3ページに、事務局案ではB評価としています。このB評価というのは、1ページ戻っていただいて、2ページ目、全体評価の区分が書いてありますが、「中期計画の達成に向けおおむね順調に進捗している」にあたります。その一つ上は、A評価で「中期計画の達成に向け順調に進捗している」になります。なぜこのお話をしたかといいますと、5ページを見ていただいて、こちらに項目別評価結果をのせています。どの項目がAで、どの項目がB、Cなのかというのを一覧にしています。当初事務局作成例では、財務内容の改善がC評価となっていました。こちらがB評価に変更となりました。B評価2つ、それ以外がA評価となりましたので、全体評価がB評価とするのが妥当なのかどうか、ご意見を頂ければと思います。

【委員長】「おおむね」か「順調」かの違いですね。

【委員D】去年はAですか、Bですか。

【事務局】昨年度は、Cが一つ、Bが2つ、Aが4つ、で、全体はB。Cが一つあることから、AはないだろうということでB評価としております。

【委員長】コロナからすると同じような条件ですね。公立化してから今年目ですか。

【事務局】今は2年目の評価をしていただいています。

【委員長】今は半ばに来たということですね。そうすると来年になると、公立大学らしく一つランクが上がっていくということですね。今は過渡的な状況ということですよ。あまり早くAに上がりすぎると、ハードルが上がりますから。

【委員A】Cがなくなって、おおむね順調。だから、B、ということで良いのではないのでしょうか。来年は順調にいくでしょう、という期待で。Bだと思いますけど。まだAではないと。

【委員E】私もBだと思います。財務の項目がCからBになりますが、今年校舎が完成するんですよ。その影響もまだ出ていない中で、一つ総合評価を上げるという話にはならないと思います。

【委員C】私もBが良いかなと思います。大項目で引いてみたら、ほとんどがBですから、点数

の付け方でAになっているだけで、全体感としては、Bは、十分、所謂及第点という定義ですので、Bが妥当かなという印象を受けました。

【委員長】 私も、理科系の大学ですから、外部資金なども、もっととれるはずだと思うんですよね。その辺りが、今頭打ちになっているところが見て取れますので、今ここでいい評価を出しますと、学長も多分言いにくくなってくると思います。これで十分満足な点数だから良いじゃない、と先生方が思ったら困ると思います。外部資金にしてもなんにしても、先生方が頑張らないと数も増えないし額も大きくなると、他の公立大学に負けてしまうということにもなりますので、そういう意味では、今回はAではなくBにしておいてですね、あとは先生方の努力だよ、っていうところをきちんと言った方が良いかもしれません。市というバックがあるから安心して彼らは仕事ができる。あとは自分たちでとってくる番になったよ、ということだと思いますので、これから外部資金、科研費など、研究のためのお金をとるような成果を上げていく、という努力してもらおうということで良いのではないのでしょうか。私はトータルしてBで、まだまだ努力の余地があるよというところを見せた方が良いかなと思います。

そこで一番大切なことはですね、やっぱり先生ですよ。学生は公立化で変わった訳ですから、あとは先生がいかに学生を伸ばしていくかということと、自分達の研究成果を高めていって、黙っていてもお金が集まってくるっていう状況を作っていくと。そういうことじゃないかと思います。如何でしょうか。

【委員D】 了解いたしました。Bということで。わかりました。

【委員長】 ではBということで。外部資金をもっと取るような成果を上げてくださいよというのが、委員からの意見でしたというようなことをつけていただいても結構です。

【事務局】 審議いただいた内容を踏まえまして、評価案を作成したいと思います。